

人麻呂の 暗号

藤村由加

新潮社

人麻呂の 暗号

藤村由加

新潮社

ひとまろ あんこう
人麻呂の暗号

発行 一九八九年一月三〇日

二刷 一九八九年八月一〇日

著者 藤村由加
ふじむら ゆか

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社

所在地 162 東京都新宿区矢来町七一

電話 業務部(03)二六六―五一二
編集部(03)二六六―五四一

振替 東京四―八〇八

印刷所 錦明印刷株式会社

製本所 大口製本株式会社

© Yuka Fujimura 1989, Printed in Japan

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛お送り下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

価格はカバーに表示してあります

ISBN4-10-371901-X C0092

目次

第一章	開かれた古墳・万葉集	5
第二章	枕詞が解けた	37
第三章	多言語を操る歌詠み	67
第四章	人麻呂は告発する	109
第五章	死のジグソーパズル	145
第六章	人麻呂の遺書	181

アガサからの手紙	242
----------	-----

人麻呂の暗号

〈凡 例〉

朝鮮語について

会話のことは現代韓国語音で記したが、歌は『李朝語辞典』（延世大学出版・劉昌惇著）、『朝鮮語大辞典』（大阪外国語大学朝鮮語研究室編）で調べ、古語のあるものはその古語を使用した。

漢字について

漢字の音に関しては、すべて藤堂明保博士の『漢和大字典』（学習研究社）、『漢字語源辞典』（学燈社）によるものである。

第一章

開かれた古墳・万葉集

聖王德太子
豐聰耳尊

フェリーは白い波の尾を曳きながら海原を渡っていく。夕映えの中をさまざまな輪郭を持った島がゆつくりと過ぎていく。この海峡の風景はずっとこのようだったにちがいない。舟の形や人の姿は変っても大昔からずっと……。

かつてどれほどの人々がこの玄界灘を往き来したのか。まだ国境が不確かだった頃、日本という国もまだかたまっていず、従つてはつきりとした外国という意識もなかった古代のことである。住み易さを求めて、この気候温和な列島に海でつながるあちらこちらから人々が渡つて来ていた。とりわけ距離も近く、海流の利にも恵まれた朝鮮半島から渡来した人々の数は圧倒的に多かったに違いない。今、甲板に立つて手すりにもたれている私の気分も、外国に行くというよりは、時を遡つて何か親しいものを求めて、向う岸へ渡つていくという気分である。

いつのまにか夕映えは去り、薄青い明るみを残すだけになっている。甲板を吹く風は冷たいというほどではないが、しばらく当っていると耐えがたくなってくる。私は一足先に船内に戻ることにした。関釜フェリーはこれから夜のとばりの中、私たちの眠りをゆらしながら進み、目覚める時はすでに釜山港に浮かんでいるはずである。

韓国にはこれまでに二度飛行機で訪れた。成田からソウル^{ソウル}までわずか二時間余り、便利のようであるが、この船旅に比べるといかにも無機的で味わいのないものに思えてくる。それよりはまず日本列島

を西へ抜けて下関からおもむろに船に乗り、海を越えて釜山に渡り、韓国の田園を横切りながらソウルへ向うという方が、気分としてはかえって近く感じられる。

自分の船室に入る前に私は、大ざっぱなしきりがあるだけの広間の一画で、くつろいでいるおばさんたちの話す韓国語に魅かれるように仲間入りをしていた。

おばさんたちのほとんどが北九州の在日韓国人で、商いのためにこの海峡を行ったり来たりしているという。さっき乗船の際に免税のウイスキーを分け持ってくれないかと頼まれて戸惑い、結局断ってしまった。でもその時のやりとりがとりもつ縁で、こうして座に交わっている。ビールを飲みながらのおしゃべりの中身は、よくある世間話や身の上話である。

「あんたたち学生？ 東京から来たの。あたしの息子もそっちに住んでいるんだよ」とか、

「うちの嫁は日本人んだけど、キムチが好きでねえ」

とかいった類。けれども普通と違っていたのは、おばさんたちが完璧な日本語と完璧な韓国語を、タイミングに応じてひらりひらりと換えながら自在に話していることだ。私もできる限り韓国語でしゃべっていた。おばさんたちは私を勝手に同じ在日韓国人だと決めこんでいるらしい。私が日本人だと言っても、何も隠さなくたっていいだろうという顔をしている。みんな顔を見ただけではどっちの国の人間かわからない。ことばも両方わかるとなると、こういったおしゃべりのレベルでは国の違いも感じなくなってしまう。それが不思議なことに、とても居心地がいいのである。

ふとまた、古代はどうだったかな、と思った。船の上では、今私たちが話している日本語や韓国語にかぎらず、中国の色々な地方のことばやウラル・アルタイ系のことばなど、私たちの想像をこえるさまざまなことばが聞こえていたことだろう。そもそも、今でいう「国語」や、それに対する「外国

語」という意識のかけらもなかった時のことだ。あったのは多分、その人にとっての比較的わかりやすいことばと、わかりにくいことばだけだったであろう。

聖徳太子はことばの天才

「아이, 귀여워라」
アイ、キヨウワラ

三、四歳の頃のまっ赤なこどもが眠い目をこすりながら、雑談に夢中な母親の膝にもぐり込んだ。その瞬間、無意識に私の口をついてでたことばである。私たちが多言語活動で楽しんでいる物語の日韓版、センテンスごとに交互に日本語と韓国語で聞こえてくるテープの一節、それは「わあ、可愛い！」という日本語に対応する韓国語の音声だった。その「キヨウオラ」という音声を始めて聞いた時、私は咄嗟に日本語の「清らか」ということばを連想したことを思い出していた。

思えばそれが私たちの記紀・万葉探究へのきっかけだったのである。多言語活動の提唱者、我らが祭酒——中国において大学の学長などを表すことばで、まさに我々が祭酒は無類の酒好きで何かにこつけては学生を集めて飲み歩く——が韓国語をこのことばの活動のひとつとして取り上げた時の話を思い出す。

「隣の国のことばを大切にしよう。ことばを大切にすることは、そのことばを話す人間を大切にすることだ。隣の国の背後に世界があるのであり、隣の国を飛び越えた世界はない。多言語人間とは、どんな人をも飛び越えず、すべてのことばに開かれた心なのだ」

そして、私たちの韓国語や中国語などの活動が始ったのである。それから六年たった。

その頃のことである。

「古代日本ではさまざまなことばが飛び交っていた。人間は本来多言語存在なのである」

古代日本の言語状況を独特の想像力で語る祭酒の話聴きながら、私たちはその意外な発想に好奇心をそそられた。知らず知らずに私たちは、「日本は単民族単言語国家である」という今日の常識に馴らされていたのだった。

「聖徳太子が十人の間に一挙に答えられたという話は、僕には信じられない。人間は二人の話を同時に聴くことさえ不可能なのだ。しかし、彼がいわゆることばの達人で、中国人とは中国語で、古代朝鮮人とは古代朝鮮語で、アイヌ人とはアイヌ語で、また日本のさまざまな方言の間にも答えられたというのなら、十分理解できる。聖の一字をよく見てごらん。聖とは耳と口の王者ではないか。いまだ国語など定まらない言語流動期に、ことばの達人こそ、その共同体の水先案内人、リーダーとしての資格がある聖なる者だったのではなかったか」

そう言つて祭酒は悪戯っぽく笑つた。

「聖徳太子のまたの名は豊聡耳尊トヨサトミミノミコというじゃないか」

その時、この話を深い洞察力を持つて聴いていたのは私たちの研究のリーダー、アガサただ一人にすぎなかったと思う。

私も韓国語が話せる

酔夢にも似た船旅を経て、釜山より一路セマウル号で北上し首都ソウルに着く。

私にとって三度目のソウルである。いつもその活気には目を見張らせられる街なのだが、前に来た時よりも、オリンピックをひかえての都市開発がぐんと進んでいる。池袋のサンシャイン60より三分高いことを誇る六三ビルユクサムも竣工していた。東洋一の高さというわけである。どこもかしこもガラス張り、ピカピカのビルだらけである。そんなビルの谷間に、伝統的な韓国の家屋が肩をすぼめるように並んでいる。

何といつても私たちが「わあ、韓国にやって来たんだ！」と実感するのは、ハングルの看板の汎濫を見た時である。かつて漢字を共有した隣り同士だったことを忘れさせるほどの、ハングル、ハングルの洪水である。漢字の看板はほとんど見あたらない。

前に来た時は動いている車の中から看板を読もうとしても、最初の一字がやつと間に合う、そんな程度だった。今度はもうずいぶんすらすらと速く読めるようになっていた。「서울」とか「김치」など一つ一つ声に出して読んでいた。こんなにすらすら読めることが、自分でも信じられず不思議でたまらない。そのうち「キャバレー」「オリエント」など、読んでみてから、なあんだ英語だったのかというものもあつて笑つてしまう。日本では外来語は主としてカタカナで書き分けるが、韓国ではハングルひとつの中にヨーロッパ語も漢語もすべてがもぐり込んでいる。

韓国語に親しみ始めた頃、初めは雑音のように聞こえていた韓国語の音声も、繰り返して聴くことで、一年もたつとずいぶん耳に残るようになってきた。そのころになると音楽をハミングでもするように、韓国語の断片が口について出るようになった。言える部分が増え、自分の言っている韓国語の大まかな意味も見えてくるにつれ、そのことばを解る人、受けとってくれる人に無性に会いたくなった。韓国とのホームステイプログラムに、私は一も二もなく参加したのだった。四年前のことである。

初めての韓国訪問での私のホームステイ先にはこどもが四人もいて、お母さんはいかにもお袋さんと呼ぶにふさわしい、そんな庶民的な家庭だった。少々日本語が話せるのはお父さんだけ、しかも昼間は仕事で不在である。私たちのことば探しが始まった。私はまるで二、三歳のやつと片言を話し始めた韓国の赤ちゃんになったような気分だった。

「많이 먹어라 (沢山お食べ)」

やさしい엄마(お母さん)は、いつも手製のキムチと御飯を山盛りにして、目を細めてすすめてくれる。私は、「감사합니다(ありがとう)」の繰り返しである。私は、いつも家にいる五歳と二歳の女の子と特に仲良しになり、いつの間にかまるで家族の一員になっていた。何といってもチビたちといると、言語的にやつと対等でいられるようで安心なのだ。

ある時、お腹が空いて思わず、

「배고파」

と言ったら、엄마(オシマ)が笑いこぼれた。たしかにテーブルの中にある、日本語の「お腹が空いた」に対応する韓国語の音声のはずである。よく聞くと、それは「お腹が空いた」の幼児語で、むしろ日本語の「腹減った」のニュアンスに近かったらしい。年頃の娘が「腹減った」では色気も何もあつたものではない。

「배가 고프니까(オシマ コッポムニダ)って言うのよ」

엄마(オシマ)があとでやさしく教えてくれた。

しかし一週間も過ぎるころになると、엄마(オシマ)の話す韓国語もほとんど解るようになっていた。そんな自分が天才のように思えてきたことが昨日のことのように思い出される。無意識に私の中に溜っていたテーブルの韓国語が、そのことばが通じる空間を得て、溢れるように話し始めていたのである。

異邦より来たる

「理窟っぽいとか白っぽいの、っぽい」というのも韓国語의 보이다(ボイダ) (見える) から来たことばではないか?……」

その頃、私たちの仲間の間では日本語と韓国語とで音声が似ていることばを見つけるのがはやってた。「마니모그」의 먹어(モグモグ食べる)は、日本語の「モグモグ食べる」という時のモグの元ではないか。

「배고파(腹減った)」は日本語の「お腹がペコペコ」に通じるのではないか。「のっぽ」というのは韓国語の「높은(高い)」からきたことではないか——などなど、次から次へと見つかつていく。日本語の「あらそう」というのも、韓国語では「알았어(わかった)」となる。擬音語、擬態語にいたっては、ほとんどが似通っているということもわかってきた。だいいち語順が同じであり、ことばのメロディの大まかなうねりも似ているのである。

実はこのように日本語を韓国語に対応させる研究はずいぶん昔にも行われていた。江戸時代の学者新井白石は『東雅』の中で、日本語の中に韓国語の転じたものが多いことを述べ、その実例を八十語ほどあげている。

「母(おも) 旧事紀、日本紀等に母の字、読て、『オモ』といひけり。百済の方言にも母を「オモ」と云へり、今も朝鮮の俗、母を『オモ』といふは古の遺言也……」

また、同じく江戸時代の考証学者藤井貞幹に至っては『衝口発』で次のように断じている。

「本邦の言語、音訓共に異邦より来たりしものなり。和訓には種々の説あれども、十に八九は上古の韓音韓語、あるいは西土の音の転ずるなり」

いつの間にこのような観点が日本語の研究から消えてしまったのだろうか。私たちの記紀・万葉の研究は、総じて日本語系統論を問題にしているのではない。隣接の言語が互いに影響し合ったであろう、その関係性を問題にしているのだ。渡来人たちが古代日本の言語世界に大量の彼らのことばを運び込んできたということは疑いようのないことなのだから。

興味深いのは、日本語ではもう意味の失われているように見えることばを韓国語におきかえてみると、意味がくっきりとしてくるものが数多くある。日本語のモグモグという音が、もともと食べるという意味を持っていたのではないかということなどもそのごく身近な一例に過ぎない。考えてみれば、

はじめから意味のないことばなどありえないではないか。

だるまさんがころんだ

私たちが韓国語の音声に、日本語の意味を見つけ、「アイ、キョウオラ」の音声に日本語の「清らか」の語を連想するなどワイワイやっているころ、アガサはすでに一歩先に踏みだしていた。親から子へと伝承された昔ながらの決まり文句が、日常の暮らしの中にいっぱい埋められている。そういったことばは、いちいちものと意味がわからなくても誰も気にしない。これこそ韓国語で見なければ意味がみつかるかもしれない——というのだ。

アガサは「いないいないばあ」を例にとった。誰もが赤ちゃんをあやす時に思わずやってしまうしぐさである。これに韓国語をあてはめ、「있나 있나 있나 있나」とした方が、ぴったりとくるというのだ。意味は「いるかな、いるかな、見て！」となる。

この話には、私たちもさつそくとびついた。私たちがふだん何気なく使っている意味不明のことば——そうだ、歌いつがれているわらべ歌や遊びことばは忘れられた韓国語の宝庫かもしれない……。ここではそのうちのひとつだけを紹介しておこう。

「だるまさんがころんだ」という遊びがある。だるまさんといえば例のまっ赤な人形を思い浮かべるが、本来は、中国禪宗の始祖、菩提達磨。「面壁九年」、壁に向って九年間座し、悟りをひらいたという故事がある。

ところで、達磨の達をダルと読むこと自体、日本語で他に例があるのだろうか。中国語では「da」。

ダルと読むのは韓音においてのみである。
座りっぱなしの人が転ぶというのも変である。「ころんだ」という音に近い韓国語を探すと「걸어온다(歩いてくる)」があった。神妙に座禅を組んでいるはずの達磨が、かりに歩いたとしたらどうだ

ろう。それを見た者も、見られた達磨もびつくりするに違いない。

これを実際の遊びに当てはめてみよう。オニが「達磨さんがころんだ」と言って振り返る。皆は、パッと立ち止って「どうだ」と言わんばかりに身じろぎもしない。これを繰り返すうち、歩いているところを見つけられてしまった子はオニになられる。この遊びが「始めの一步」のかけ声で始まることや、おしまいに「何歩」で届くかを競うことなどを考えあわせても、「転んだ」よりも、「걸어온다(歩いてくる)」の方がふさわしい。

このような例が他にいくらでも見つかるのである。

ハングル文字の背後に

ソウル到着の夜、夕飯をとった店は横丁を入り込んだ所にある純韓国式の小さな食堂だった。ハンゲルの看板の間をぬって歩いてきたのに、その店に入るとうって変って漢字があふれている。天井も壁も毛筆の漢字だらけなのだ。お店の人に尋ねてみると、本草学(藥草学)の能書きであるらしい。

この店に限らない。韓国では一歩家の中に入れば、漢文の掛け軸などは、日本よりもずっと多く見うけられる。前にホームステイした家もそうだった。漢字を一掃するかのようなハングルだけの表通りとは対照的に、家の中にはひっそりと根強く漢字の伝統が息づいているのである。

韓国語の「こんにちは」は「안녕하십니까(アニョンハシムニカ)」というのだが、その「안녕」は、もともと漢字の「安寧」で、また「감사합니다(カムサハムニダ(ありがとう))」の「감사」は「感謝」の韓国訛りである。これらの韓国語がもともとは中国語(漢字)の輸入だった——と知ってなるほどと思つたものである。

そのうち、韓国語そのものだと疑いもしないで使っていた「미안해요(ミアンヘヨ(ごめんね))」や「죄송합니다(チエソフンハムニダ(申し訳ありません))」の「미안」の部分(ミアン)が漢字の「未安」であり、「죄송」が「罪悚」であるというよ